

(別紙2) 審査の結果の要旨

論文題目 『近世日本の商人と都市社会』

氏名 杉森玲子

本論文は、近世日本における商人の特質を、この間著しく進展してきた近世都市社会史との関連において、再把握しようとする試みである。ここでは研究の主たる対象を、上野・武蔵など北関東の在方市・町や江戸・京都に設定し、商業や流通の担い手である商人と彼らが集う場について、売場の諸形態や在地社会における都市性に注目しながら、その本源的な形態とその後の展開の解明を中心課題として多面的に検討するものである。

まず「序」において研究史が手際よく概観され、本書の課題・方法が述べられたあと、本論部分は「在方町と市」、「商人の活動」、「都市社会への展開」の三つの編・計10章から構成されている。

本書の主要な成果は以下の4点である。

①上野国の桐生・下仁田・下室田・中之条、武蔵国小鹿野などを素材として、在方市の社会と空間の構造的な特質を、これまでにない高いレベルの実証水準において詳細に解明し、中見世・座・地主(屋敷主)・商人集団など、市に関わる諸要素を多面的に摘出した。そして、在方市の社会=空間構造、市における売場の諸形態、売買当事者の性格、市以外における売買の場=宿の特質、などの諸論点を考察した。

②市とならび、在地社会における流通の主要な拠点として、商人が集う場としての「宿」=商人宿の広汎な存在を見いだした。そして、市との関係や宿の諸形態を解明し、そこに見いだされる問屋的な機能、価格形成機能などについての豊富な事実を提示しつつ、多面的に論じた。

③中世後期の市や商人に関する研究で提起されてきた、商人・問屋や市・町、市見世・内見世などに関する論点を踏まえて、17世紀の在地社会における商人や市の展開過程を、豊富な事例分析と共に緻密に論じ、それらの本源的な形態における特徴を析出し、中見世から座へという、中世から近世への移行に関する仮説を提示した。この点は、近世巨大都市社会史研究の中で提起されてきた、市場社会、問屋・商人、売場などに関する議論を、それぞれの原初的な形態に遡及させて考察するという点で重要な意義を持つ。

④江戸の古着市場(富沢町市場)の機能と特質を検討し、古着の売り物の中に呉服や太物類が含まれ、三井越後屋などの呉服屋にとって、これらの取引がその経営にとって不可欠な局面であったことを初めて解明した。

本論文は、分析の確かさ・緻密さ、論点摘出の的確さ、論理展開と叙述における明晰さ、などの諸点において、きわめて高い水準に有り、当該分野における近年まれに見る重要な達成であるということが出来る。商品自体に即した分析を課題として残し、また結論にあたる部分を欠いて、序で提起した課題に対応する全体のまとめがやや弱い印象を与えているが、本審査委員会は、上記のような顕著な研究成果に鑑みて、本論文が博士(文学)に十分値するものとの結論を得た。